

文章を書き付けた理由を説明するに苦しまざるを得ないであらう。

六 殘經の内容及び性質

以上殘經の外形上の解説を施したから、こゝに進んでその内容及び性質について述べなければならぬ。冒頭第一行に序聽迷詩所經一卷と、經題及び卷數を掲げてあるが、かゝる經名は、勿論かの尊經の目錄の中にも見えず、其の他に於ても同様認むることを得ない。またこの經名が如何なる意味を有するかについても、この儘の形では自分には何とも解釋し得ない。併しながら此の經題中の迷詩所は迷詩訶を誤つたもので、メシヤの義に外ならぬであらうと思ふ。之については便宜上、後に迷師訶といふ語を解く所で述べることにする。次の第二行、即ち經の文句の初に於て、「余時彌師訶說天尊序娑法云」と説き起してある。思ふに之は彌師訶が天尊序娑の法を説いて云はくと讀むべきであらう。彌師訶は言ふまでも無くメシヤを謂ひ、天尊といふのは度々この經中に見える語で、115行に記さるゝ所から考へて見ても、一神論に用ひられてあるのと同様に神 (Lord, God) を指すものである事疑ない。また後文に「天尊法」(75)とか、「天尊教」(58 59 60)とか、「天尊戒」(58)とか、或は「天尊法教」(77)とかいふ文字が屢見える。此等の例から考へると、こゝに天尊序娑法と謂ふのは、神の法の中に特に序娑の法と謂ふのがあつて、それを説いたものかとも思はれるが、別に序娑は天尊即ち神の名であつて、「神なる序娑の法と」いふ意味とも考へ得られる。經中に漢字を用ひて音譯されてある言葉は、固有名詞に限られて居るのを見ても、之を神の名と認めた方が適當かと思ふ。若しかく見て過無しとすれば、聖書にいふ神即ちエホバを指したものでは無からう。